

ちり はら 塵を払うの“払う”という字に、子どもの“子”と書く「ほつす 払子」という仏具があります。

これは、法要儀式の際に、法要をつかさどる“^{どうし}導師”が持つもので、動物の毛を束ね、短い柄^えをつけた仏具です。柄の部分を持って左右に振ると、「ファサッ、ファサッ」と、束ねた部分が波打つようにゆらぎます。

もとは、古代インドの仏教教団において、修行者が虫や蚊を追い払うために使用したもので、初めは木の葉などで払っていましたが、音が出て修行の^{さまた}妨げとなるため、^{のち}後に動物の毛を束ねたものを用いるようになったとされています。

熱帯地方ですので、修行中、虫や蚊に悩まされることが多かったようですが、それらを殺すことは決まりによってできないので、「払子」で追い払ったのです。いわば、生活道具であったわけです。

その生活道具が中国に伝わると、意味合いが変化していきます。

これは諸説あるのですが、まず「払子」の束ねた毛の部分をお釈迦さまの髪^{かみ}の毛に見立て、煩惱や災いを払う功德を持つと考えられるようになりました。

また「払子」は、もとは麈^お（おおしか）の尾で作られていたとされています。麈^お（おおしか）は、群れをなして棲息^{せいそく}しリーダーが尾を振って行動を指揮するという^{こじ}故事から、「指揮をとる」という意味合いも持つようになったようです。法要儀式をつかさどる導師が持つという形は、ここからきているのかもしれませんが。

このように、インドでは実用的であったものが、中国に渡り、象徴としての仏具に変化していきました。

現在の日本では、馬やヤクの毛など、白い色のものを用いることが多いようです。

みなさんも、葬儀や法事などの儀式に参列することがありましたら、導師の持ち物に注目してみてください。先に束ねた動物の毛がある仏具を持っていれば、それは「ほつす 払子」です。作法は、三回振る場合は右・左・前、五回であれば右・左・右・左・前と導師が大きく払子を振り、儀式をおつとめします。

その「払子」は、古代インドに通じていること、そして煩惱を払い、災いを払うという意味合いがあることを、改めて感じてみてください。